2022年4月3日 川越教会

丸山　勉

与え尽くした人（１）

［マルコによる福音書15章1～15節]

夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったので、ピラトは不思議に思った。ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

[１]　イエス裁判の場面の様々な人々

新年度最初の礼拝をご一緒に捧げられますことを感謝致します。この年度も礼拝を中心とした交わりをしながら、ご一緒に主を仰ぎ見る幸いの中に歩みを共にしたい思います。今この時期は、教会の歴の中でもクリスマスと並んで一番大事な時期を過ごしています。来週の日曜日には主イエスの最後の5日間を迎える受難週に入ります。その週の金曜日に主は十字架上で息を引き取られました。そしてその日から3日目の日曜日はイースター。主がお甦りになったことをお祝いする日です。今年は4/17がその日になります。今日はその二週間前の日曜日になりますが、「受難節・レント」の時期のもう後半に入っています。

『聖書教育』誌に従って、今日はマルコによる福音書15章の前半を、来週は15章の後半をご一緒に味わって行きたいと思います。今日の箇所は、主イエスが十字架刑となるそのことがいかに決定づけられていったか、そのことが生々しく描かれている箇所です。ここには様々な人物たちが登場してきます。イエス・キリストの他、順を追ってみると、1節には祭司長たちが長老や律法学者たちと共に、とあります。そのユダヤ人たちの宗教生活を仕切っていた人々、彼らがいます。彼らは、ピラトという人物に主イエスを引き渡しました。ピラトとは、ローマから派遣された属州総督です。当時はユダヤはローマ帝国の下に支配されていた訳です。このピラトとイエスとのやり取りというものが割と詳しく描かれています。更にここには多くのユダヤの群衆がいました。彼らが「十字架につけよ」と叫び立てたと15節にはあります。また、16節以下には、もうそこにはピラトは姿を消しますが、ローマの兵士たちが登場してイエス様を総督官邸の中に引いて行き（イエス様は捕縛されています）、イエスをさんざん嘲弄し、叩き、唾を吐きかけ、イエスを着せ替え人形のようにして笑い、十字架につけるためにまた外へ連れ出した、と記されています。またこの人の言葉こそ記されていませんが、バラバという犯罪人が、イエス様の替りに恩赦のようにして釈放されたということがここには描かれています。

［２］ ピラトは私たちのプロトタイプ

キリスト者作家の犬養道子氏は『新約聖書物語』の中で、これらの登場人物は「プロトタイプ」なのだと書いていました。「プロトタイプ」とは、元になる形とか、模型の様な意味です。私たち全ての人間の‟原型”がそこに見て取れる、と言うのです。聖書の人物はここに限らず皆そうだと言えると思いますが、殊この受難物語の中では、人間の隠された罪とか闇といったものが浮き彫りにされ、ここでの登場人物がまるで自分自身の模型となって迫ってくるように思えるのです。

犬養道子さんはこう書いています。「己が内面に最も累々強力に住むと思われるのはピラトである。イエス裁判のこの箇所はいつも戦慄を覚えずに読むことは出来ない」。ピラト的なものが「己」の中にあると言うのですね。実は私も聖書からそれを感じます。無責任な「群衆」の存在というものも問われてきますけれども、それはある意味、群集心理がそこに働いたとも言えるかも知れません。ただピラトの場合は、私はそれは「バランス感覚ゆえの罪」と言えるのではないかと思います。どういうことかと言いますと、彼は「賢いバランス感覚」を持っていたのです。自らが傷つかない道を選び取り、結果、合法的にイエスを死へと追いやった。もともと彼はあまりユダヤ社会の内部のことには関わりを持ちたくなかったようです。イエスが今目の前に連れて来られたけれども、面倒臭いと思ったのでしょう、10節に「祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである」と書いてあります。内部問題だと理解していたのです。ピラトはイエス様に対しても「お前がユダヤ人の王なのか」と訊ねています。ここにはピラトの、ユダヤという奇妙な宗教国家の内部のことに自分は深く関わりたくない、私はたまたまこの貧しい僻地の総督に甘んじているけれども、暴動のようなことが起こったら政治的に次がなくなる。よし、この者たちの昂った思いを鎮めるためには、恩赦を適用しようと考えた。さすがにあの悪名高いバラバを許せとは言わないだろうと踏んで「あのユダヤ人の王（つまりイエス）を釈放して欲しいか」と群衆に問いかけました、ところが既に祭司長たちの扇動もあって、バラバの方を選び、イエスに対しては「十字架につけよ」という声が浴びせられたのです。想定外のことでした。しかしヨハネ福音書を見るとピラトはこの時「わたしはこの男に罪を見出させない」（ヨハネ19:6）と語っていたにも関わらず、彼はもうそれ以上のことはしませんでした。彼は自分を護ったのです。マタイ福音書を見ると「これはもうお前たちの問題だ」と、ユダヤ人たちに委ねてしまいました。それがこの世的な「バランス感覚」です。そしてその結果、神の子の「処刑」が決まったのです。

…この一連の物語の中、この時の空気に乗せられた群衆も含め、果たして私たち自身は居ないのでしょうか？

私たちも「バランス感覚」で生きている所がありますよね。一概に悪いとは言えないでしょう。そのことによって自分が路頭に迷うとか、家族に危害が及ぶとか、そんなことが頭によぎるとやはり計算するところがあると思います。しかし私たちは、最終的には神様の前に立たされるのではないでしょうか？「バランス」の問題ではなく、究極あなたは何を信じ、誰に従って来たのですか、と今も問われていないでしょうか。先週も弟子ペトロの裏切りを見ましたけれども、自分を護り、イエス様のことなど知らないと言い切ったような「罪」や「弱さ」は私たちの中にはないのでしょうか？―「プロトタイプ」なのです、聖書の人物たちは。

そこで私たちがよくよく見つめなければならないのは、この話の中でただ一人黙って、されるがままに自分を与え尽くしている人の存在です。ピラトに対して「それはあなたが言っていることです」という一言しかマルコ福音書には載っていません（それは、わたしが何者であるかは客観的なことではなく、信仰とはあなたの責任において決断するということでしょう）。ずっと沈黙です。そして体が裂けるほど鞭打たれ、その挙句に兵士たちには棘だらけの茨の冠を被せられ、紫の衣を着せられ、「ユダヤ人の王万歳」と揶揄され、叩かれ、唾を吐かれても無言で引き受けておられるこの人の存在をよく見よ！と聖書は語っているのです。この時のイエスの無言こそ、私たちの心に雄弁に語っていると思います。

［３］ 全くバランスを崩した神の愛

昨日もバッハの『マタイ受難曲』を聞きながら準備していたのですが、発見がありました。14節でピラトが「いったいどんな悪事を働いたというのか」と尋ねると群衆は「十字架につけよ」と叫んだ、と繋がるのですが、この間にマタイ受難曲は聖書の言葉の合間にソプラノの歌でレスポンスを挿入しているのですね。その歌詞が素晴らしいのです。

―「いったいどんな悪事を働いたというのか」。その後です。「彼は我らすべての者のために良いことをして下さった。盲人には光を与え、足なえには歩く力を与えられた。我らに御父の言葉を告げ、悪魔を追い払い、悲しみくずおれる者を引き起こし、罪人を迎え入れて友となられた。わがイエスはそのほか何もなさいませんでした」。

本当にそうではないでしょうか！彼は、「愛」以外のなにものもなさらなかった。ですから、続くアリアでソプラノはこう歌っています。

―「愛ゆえにわが救い主は死のうとしておられます。罪ひとつ知らない御方なのに。それは永遠の滅びと裁きの刑罰がわが魂に覆いかぶさらないために」。これこそが、聖書が私たちに告げている究極のメッセージだと思います。

「十字架の死」は、人間的には敗北に見えますが、あれは神の子が、神の身分であることをお捨てになって私たち罪人と連帯して下さった形であり、私たちを滅びから救うために全くバランスを崩した「愛」そのもののお姿なのです！

この「愛」に触れた時、私たちは知らされると思います。何か常に計算をして生きることをやめること。単純に、純粋に、究極私たちを迎え入れて下さる（下さった）このお方の愛を本当に信じて生きるように招かれていることを！

「主よ、私たちは誰のところに行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」（ヨハネ6:68）。

お祈り致します。

神様、新しい年度を、主の受難を思い起こすことから始められる幸いを心より感謝致します。この救い主の傷と痛みは、私たちの故です。結局は自分可愛さに逃げ込み、あなたを捨て、涼しい顔をして生きてしまう私たちの罪を思わされます。しかし、そこであなたは私たちをお捨てになりませんでした。まるで愛をこの大地に釘づけるようにしてあなたは十字架にかかって下さいました。どうか、この私たちの頭では計算できない愛を、しかと受け止めさせてくださいますように。これから行う主の晩餐式にも、あなたご自身がご臨在下さいますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。